

詩集 靈智の歌

著者 鷺巢繁男

發行者 小田久郎

發行所 株式會社思潮社

東京都新宿區市谷砂土原町三十一十五

電話二六七八一四一 振替東京八八二二一

印刷所 福田印刷

製本所 美成社

製函所 美濃羽製函

發行日 一九七八年一月十五日

定價 一二〇〇圓 1092-100058-3016

©1978, Shigeo Washizu

★ 靈智の歌 ★

鷺巢繁男

ῥσματολόγιον

ΓΝΩΣΕΩΝ

思潮社

ダニエルの黙示・第二之書

詩集 靈智の歌

APOCALYPSIS DANIELIS

Liber Secundus

ἑξαμολόγιον

ΓΝΩΣΕΩΝ

1976~1977

第一の歌

ラーの二十四時

われはこれら歌のくさぐさを聞けり。

そはいにしへの墓の中に在り。

(エジプト新王朝期の歌)

風が吹いてゐるね。

鼻腔はなふくらますタマリスの香り。高高と盛られた果實くだものの匂ひ。
そして、まどろみから醒めた神神の匂ひ。

エジプトの友よ、豎琴に倚り、

今、きみの歌は息を吞む。

ぼくはきみの傍に立つて――

だが、そのぼくはきみにとって遙か未來の人だ。

きみはこの遠い一點から名も無いぼくのことを想ひ、
ぼくはその想ひに誘はれてここまで來た。

幾千年の夜の氣圈を悲しみの翼もて廻り、
智慧もつ星の導きによつて、

やうやくここに辿り着いた。

嘗て眞向つたかもしれぬきみを覓めて――。

風がかすかに吹いてゐるね。

あゝ、この「現在」はラーの下に嚴かに灼け、
沙漠は地平で身もだえしてゐる。

怖しい沈黙が

そそり立つ巨柱に區切られて、

王も奴隸もひとしく地にひれ伏し、

すさまじく過ぎてゆく「時間」の苛酷に堪へてゐる。

やがて、神官の群が垂直の列をなし、

呪言の第一聲が放たれる。

オシリス N!!

巨大な「死」が立ち上り、ナイルの水のやうに
すべての今の端端^{はは}を豊かにひたす。

あゝ、その呪法の秩序の中で、生はこまやかに死と融合する。
彼等の剃られた頭は宇宙の法則のやうだ。

オシリス N!!

そのとききみは電撃に觸れたやうに變容し、

張りつめられた豎琴に爪を立てる。

きみの唇は今ラーの二十四時を唱つてゐるのか。

それとも、遙か未來のぼくに向つて、

きみの言葉はそこはかとなく語りかけてゐるのか。

ぼくがここに來てゐるといふのに、

見れども見えぬぼくに向つて――。

それとも、イシスの夜を、夜の黄金の翼の歎きを？

ゆるやかに起立するオシリスの復活を？

だが、どうしてぼくにきみの歌の意味がわからう。

きみは恐らく戀の歌を呟いてゐるのかもしれないのだ――。

突如、鞭が鳴る。

日と月を従へて、晝の怒りの中で、

奴隸たちの背に、弓のやうにしたたかな鞭が。

眩しく切られる巨石、

宇宙の裂目から次次に白い現在が現はれる。

廣大な空間に人間たちは「形」をせり上げる。

それを磨く。

そして、高高とラッパが鳴る。

なべての音を收約して、神と交通すべく、

その威嚴と恩寵のための

王の遠征を告げる合圖。

だが、きみはやはらかに豎琴を鳴らしてゐる。

この廣場の片隅で、

それは密使の口上のやうに甘くひそやか。

あゝ、きみは無限の鎖につながれて、

なほも戀の唄をうたつてゐるのだらうか。

きみの眼は見開きながら

すでにすべての光を拒んでゐたのか。

その見開いた眼は

ただ懐しげに 時間の果のぼくにはほゑみかけてゐるのか。

鞭が鳴る。

鞭は鞭の響を打つ。

鞭は蠅の尾のやうに存在を打つ。

ラーの下、なべてのものを。

形の抱く夢を。

まこと頑な 形の輝きをも。

懼をねぶる波音がする。

まもなくラーの船が出る。

そして、ゆるやかに夜がおるだらう。

次次に發つ死者の息を追つて

スカラブの群が翔ぶだらうか。

そして、ぼくも去らねばならぬだらうか、盲目の友よ、

ラーの二十四時に奉仕するものよ、

きみも發つ。女巫たちとともに

冥く長い旅路に。

王の遠征はどこまで行つたのだらう。

ぼくらを繋いでゐる時間の鎖が鈍い音を立てて切れる。
きみの堅琴の音もいきなりぼくに眞向つて切れる。